雄安新区訪問記　～自動運転、無人スーパー、そして巨大新空港～

2018 年 8 月 19 日
日中経済協会北京事務所
所長　岩永正嗣[1]

１．雄安新区とは

（１）概要

雄安新区は、中国習近平国家主席が自ら推進する、深圳経済特区・上海浦東地区に続く新都市開発プロジェクトである。

北京市の南南西、天津とほぼ正三角形を成す点に位置し、北京、天津それぞれから 105 キロメートル。河北省保定市の雄県、容城県、安新県の３県及び周辺部分の区域にあり、保定市中心部からは 30 キロメートル、北京新空港からは 55 キロメートル。新区区域内には河北省最大の湖で、AAAAA 級の観光地ともされている白洋淀を有する。

北京と雄安新区を結ぶ高速道路と高速鉄道を新たに建設予定。北京から新空港、雄安新区を結ぶ高速鉄道は 2020 年に開通予定である。

将来の計画人口は 200～250 万人。始動区域面積は 100 ㎢（うち本格始動地区 20～30 ㎢）、中期発展区域面積は 200 ㎢、長期コントロール面積は 1770 ㎢とされる。深圳経済特区が 1991 ㎢、上海浦東新区が 1210 ㎢であるから、将来的にはこれらに匹敵する規模が目されている。

雄安新区建設計画は、2017 年 4 月 1 日に突如公表された[2]。2018 年 4 月 21 日には後述の雄安新区計画綱要（マスタープラン）が批准、公表されている。今後は、2020 年までに基幹交通網、初期地区基礎インフラ施設、産業配置枠組の基本的部分が建設され、2022 年までに初期地区基礎インフラの建設、核心地区の建設が完成するとの計画である。

（２）目的と任務

新区は、以下のような目的で計画された：①北京の非首都機能の集中的な分散、②人口経済密集地区の優良な開発新モデルの探索、③京津冀（北京・天津・河北）の都市配置と空間構造の調整・改善、④イノベーション駆動による発展新エンジンの育成。

そのために、７つの重大な任務を背負うとされる：①環境にやさしいスマートシティの建設、②美しい生態環境の築造、③ハイエンド・ハイテク新産業の発展、④質の高い公共サービスの提供、⑤便利で効率の良い交通網、環境にやさしい交通システムの構築、⑥市場の活性化のための構造的・制度的改革の推進、⑦対外開放の強化による外国との連携の新たなプラットフォームの構築。

（３）雄安新区計画綱要

2018 年 4 月 21 日、雄安新区計画綱要が党中央・国務院によって批准された。綱要は全 10 章で構成されている：①総論、②科学的・合理的空間配置の構築、③新時代の都市景観形成、④優美で自然な生態環境の創造、⑤ハイエンド・ハイテク産業発展、⑥優良な共有公共サービス提供、⑦スピーディーで高効率な交通網構築、⑧グリーンなスマート・インテリジェント都市建設、⑨近代化された都市安全システム構築、⑩計画の秩序ある・有効な実施。計画の期限は 2035 年までとされ、併せて今世紀中葉の発展未来図を展望する、としている。

計画対象地域には雄県、容城県、安新県（白洋淀水域を含む）と、任丘市鄚州镇、苟各庄镇、七間房郷、高陽県龍化郷を含み、計画面積は 1770 ㎢である。一定の区域を始動地区

[1] 日中経済協会北京事務所長。なお、本レポート作成に当たっては、現地に同行した同所澤津直也所長代理の協力を得た。また、各種情報提供いただいた在中国日本大使館平山翔吾書記官に感謝申し上げる。本レポートの「抄録」は『日中経協ジャーナル』10 月号に掲載。

[2] その前に都市開発計画を匂わせる動きは幾つかみられた。

として先行開発し、始動地区の一定の範囲に本格始動区を計画・建設する。始動地区は容城、安新両県の交わる区域とし、これを雄安新区の中心部とする。また、雄県、容城（現状都市の質の向上・拡大）、安新県城（現状都市の質の向上）、寨里、昝崗（建設）の５つのブロックを外周に建設し、始動地区との間に緑地隔離帯を建設する。また、特色ある小都市、美しい農村を若干建設し、大規模な不動産開発は厳に禁止する。

本格始動区は 20～30 ㎢とし、北京の非首都機能分散の受入れ、優良な公共サービスの提供、ビッグデータ、人工知能、バイオテクノロジー、現代金融等のイノベーション型、モデル型の重点プロジェクトを集積させる。

（４）新区計画エリアの状況

雄安新区の予定地とされている３つの県は、合計で面積が 1577 ㎢、人口約 100 万人。主な産業は、農業、又は伝統的な工業（紙・ビニール包装、アパレル、おもちゃ、機械、自動車部品、段ボール、靴製造、金属加工）及びサービス業（観光等）である。

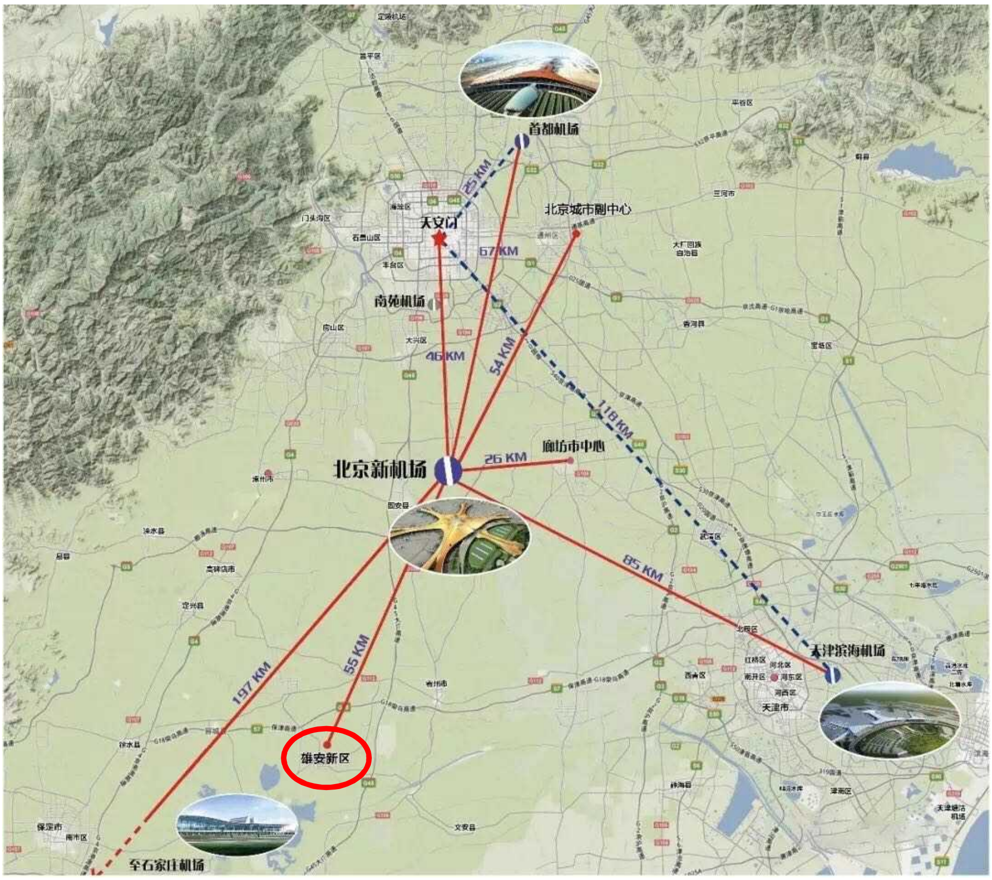
近時、最先端技術を用いたモデル建設プロジェクトである市民サービスセンターの建築と大規模な植樹活動が進められてきた。

２．雄安新区市民サービスセンター訪問記

8 月 17 日、雄安新区市民服務中心（市民サービスセンター）を訪問した。

北京市内から同センターまでは、約 140km、高速道路を順調に飛ばして 1 時間 45 分。

センターには一般車両は入れず、3 キロ離れた駐車場からシャトルバス（EV）に乗って移動することとなる。[3]



（新空港ネット記事より）

[3] 2018 年 4 月 28 日、服務中心園区は燃料油車の来場を禁止。現場では実質的に一般車両は入れていなかった。

同センターは、3 か月前にオープン。[4]元々畑と草地であったところに、管理委員会、計画展示場等各種施設が整い、内部も一定程度埋まり始めた状況。夏休みシーズンでもあり、多くの観光客が来場していた。今年初めまでは、雄安を訪れても新区を感じさせるものは看板程度であったと言われるが、本センター開業により、いよいよ内外に対するシンボリックな受け皿が登場したと言える。

一般開放されている無料駐車場

シャトルバスへの乗車待ちレーン

総建築面積 9.96 万㎡の敷地には、計画展示館、行政サービス館、会議施設、商業施設、住宅等からなる低層のビルが整然と並び、緑地も手入れされている。「グリーン、現代、スマート」を基本理念とし、例えば、緑地やアスファルトは「海綿都市（スポンジ都市）」理念の下、雨水を浸透させて循環させるなどの仕組みが施されている。

園区内に入って、最初に目に入って来たのは、計画展示館の建物。しかし、現時点では一般には公開されておらず、指導者や視察団等にのみ利用されているとのことであった。

[4] 2018 年 3 月 29 日基本建設完成

右下の QR コードから「http://csc.xiongan.gov.cn/DisplayBoard/html/index.html?id=26」の電子版マップにアクセス可能。

（1）自動運転システム「アポロ」

その隣に位置する駐車場には、奥には電気自動車が整然と並び、手前に自動運転の小型バスとレーダーを乗せたセダン数台が並んでいた。バイドゥ（百度）の自動運転システム「アポロ」である[5]。

「apollo」の文字のオブジェのある建物は行政サービス館。いわゆるワンストップサービスの提供の場であり、カウンターが並ぶ。ただし、現在ここには地元企業以外は一般の企業は投資出来ず、域外についてはハイテク、新エネ等の企業に限られるとのこと。

[5] バイドゥが 2017 年 4 月 19 日に自動車業界及び自動運転分野の協力パートナー企業に対して提供したソフトウェアプラットフォーム。中国語表記では「阿波羅」。

行政館外ではアポロとのタイアップを強調。　ワンストップサービスの窓口カウンター。

各所で「スマート化」を強調したり政府を称賛するスローガンが散見される。

自動運転実験車両の停車場。手前のカバーで覆われた 3 台は天井にレーダーを搭載した自動運転セダンと推察。

説明してくれたガイドによると、当地の自動運転車は 4 種。小型バス、セダン、無人販

売車、清掃車である。
　小型バスは「百度」のシャツを着たスタッフ等が乗車。20 キロ前後のゆっくりしたスピードで走行。セダンも 2 台程度が実際に走行していた。道路には「自動運転専用車道」の文字。ボランティアは、必ずしも技術のレベルは高くないと謙遜気味に言う。

金龍・百度の小型自動運転電気バスの全景

乗降口。乗車定員は 10 名程度か

電力供給ステーション（国家電網）

バスにはアポロと金龍（バスメーカー）ロゴ

自動運転セダン実験風景

「自動運転専用車道」

無人販売車は、白くやや大きめの NEOLIX（新石器　http://www.neolix.cn/）と、赤くやや小さめのジンドン（京東）X 事業部の宅配車が多数。人と同じか少し早いくらいのスピードで車道や歩道を走行、タブレット端末を持ったスタッフが徒歩或いはセグウェイでその後を追っていた。大きな NEOLIX は車道を直線的に進み、小さなジンドンはよたよたとした感じで歩道にも上がる。

NEOLIX 外観、アポロや新石器のロゴ　　　　　後ろには実験スタッフがセグウェイで追従

京東の移動式宅配ボックスは中関村でも実験が始まっている。携帯からの操作で開閉可能

さらに、これらよりも小型の清掃車もブラシを回しながらスタッフ一人を引き連れて走っていた。

（2）無人スーパー

園区奥の商業地区には、中信書店、サブウェイ、菜鳥駅站（宅配）、LEFIT（24 時間フィットネス）等の数店が入居。中でも賑わっていたのがジンドンの無人スーパーであった。

他の無人スーパー・コンビニと同様であると思われるが、入り口付近で説明のパネルに従って、QR コードを読み込み、インストールされたアプリから、自分の正面からの顔認証のための写真を撮影、次に携帯番号を打ち込み、SMS で送られてくる番号、更には 6 ケタの口座暗証番号を打ち込むと登録完了。自分用の QR コードがスマホ上に出る。これを入口の改札機のようなところでかざし、正面のカメラに自分の顔を向けるとゲートが開き入店。認証には若干の時間がかかり、瞬時にというわけではない。

ジンドンの無人スーパー　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　会員登録説明

入口。改札にスマホの QR コードをかざし、正面のカメラにて顔認証。右は店内の様子

商品は飲料、菓子、カップ細等。試しに買ったペットボトル飲料のふたの部分には読み取りのための回路付のシールが貼られていた。

三方にある出口は 2 段階。最初のラインに立つと商品の情報が読み取られる。次に進むと正面に大きな QR コードが映し出され、これをスマホで読み込むと金額が表示され、手元で支払いの手続きを行うと支払終了。ゲートが開き外に出られる。

何のことはない、スマホでの操作自体は日頃スーパー、コンビニで

行っている手順と変わりなく、レジで店員が商品情報をバーコードで読み取る作業が無いだけである。客にとっては、顔認証による出入りのプロセスなど面倒なだけで、メリットはあまり感じられない。入退場の管理にあたるスタッフが通常の店舗よりむしろ多い状態であるのは、新たなシステム故やむを得ないとしても、陳列には人手が必要であるほか、通常の店舗では不要のシールの貼付け作業が余計に発生しており、バーコードのように最初から商品に印刷されているようになってこなければ、むしろ手間であろう。

（３）所感

シンプルなデザインでやや無機的な感じもする建物の間の路上を自動運転の車が行きかう状況は、未来都市を感じさせる。1985 年のつくば科学万博のコンパクト版のような感じでもあり、高揚感を覚える。しかし、ちょっと冷静になってみると、自動運転と無人スーパー以外にも顔認証で解錠等ができる未来のホテル等もあるとはいうが、あくまで「ショーケース」であり、サービスセンターを以て今後の都市開発全体の成否を直ちに判断できるというものでもないであろう。

昼前であったが、帰りの駐車場までのシャトルバスは、多くの観光客でギュウギュウ詰めであった。

河北雄安新区管理委員会も敷地内に所在

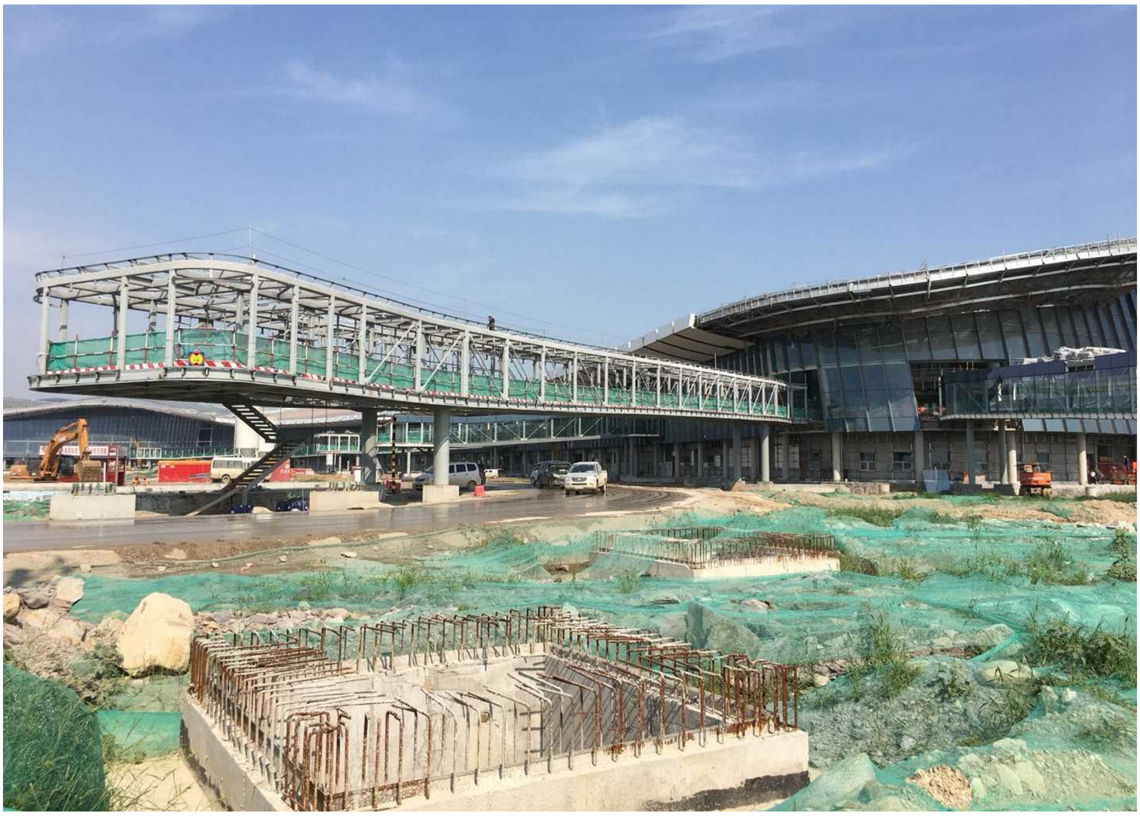
復路便のシャトルでは「我先に」の混雑

３．北京新空港

北京への帰路、北京と雄安新区の中ほど、北京から約 50 キロに建設中の新空港の現場に立ち寄った。トウモロコシ畑と集落の間の狭い土の道をトラックやダンプが行き交っているなかを走ると、広大な工事現場に建設中の巨大なターミナルビルが姿を現す。周りに比較するものが無く、大きさ実感しにくいが、よく目を凝らすと屋根の上で働く人々が蟻のように小さく見える。上からみれば 6 本の腕を持つヒトデのような形であるはずのそれぞれの腕には、更にいくつもの巨大な搭乗口が突き出している。ターミナル全体の主な構造は既に出来上がっているが、周囲は泥だらけの荒れ地。来年 10 月に試験運行という。とにかく広くて大きい。

7本の滑走路とフェニックスを模した 140 万㎡のターミナルを有する世界最大の空港。北京新空港、北京大興国際空港、北京第二国際空港などと呼ばれているが最終的な名称は未定。（図は新空港紹介 HP から）

雄安新区、新空港と北京南方の変化は著しい。数カ月もすれば、また全く違った姿になっているだろう。時々足を運ぶ必要を感じつつ、再び畑や集落の間の狭い未舗装路を走り、北京へ戻る高速道路に向かった。



建設中の北京新空港。中国当局は 9 月 14 日、名称を「北京大興国際空港」とすること、工事が順調に進行していることを発表した。